**説教20230827ローマ11：33-36マタイ16：13-20「教会の土台とは」**

**聖書には、自分たちは、この地上ではよそ者であり、仮住まいの者であり、天の国と言う本当の故郷を探し求めている者たちであることが、公に言い表されています（ヘブル11：13）。この地上ではよそ者であり、仮住まいの者であり、天の国と言う本当の故郷を探し求めている者たちこそクリスチャンです。**

**この地上でよそ者であり仮住まいであるということは、この世的な常識すれば、寄る辺がなくて、浮草のような、頼りがない、場合によってはあまり評価されない生き方かもしれません。しかし、今の世の中をよく観察していますと、一つの処を終生、根城の様にしてとどまり続けることの方が、かえって様々な問題や弊害を生み出すもとになっている様です。**

**人生と言うのは、旅であると、私は思います。アブラハムもエリヤもそしてエレミヤもみな旅人でありました。それは彼らが遊牧民族であるからで、日本人は農耕民族であるから、一つところに住み続けるのが普通だと考えるのは、最早神話でしかないように思われます。**

**私たちは、時には旅に出て、普段通っている教会とは別の教会の礼拝に出席するのも良いことでしょう。今日もそのようにして、この別府不老町教会の礼拝に出席下さっている兄弟姉妹がおられます。**

**又、人生が旅であるというのは、単に、物理的に交通手段を使って場所を移動するということだけではなくて、信仰的に日々、イエス様によって、新しい命に生かされていくということであります。私たちはこの地上で年を重ねて、遂に自分の足で歩けなくなったとしても、その留まるところで、イエス様から日々、新しい命を与えられ続けるのです。**

**今日のマタイ福音書の箇所は、イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、という様に、フィリポ・カイサリア地方という地名を語ることから始められます。先週はティルスとシドンの地方での事が語られました。イエス様と弟子たちはこの時、あちこちの地方を旅してまわっておられたのでした。この時のイエス様たちの旅と言うのは、数日後に迫っている十字架に掛けられるエルサレムへ向かっていく旅でした。イエス様は、数日後には御自分が、十字架によってこの地上を離れるのだということが判ってましたので、その前に弟子たちを、このようにあちこちの地方に連れまわしていたのでした。**

**先週語られたティルスとシドンの地方と言うのは異邦人の土地で、そこでイエス様たちはカナンの女に出会われました。そして今日語られるフィリポ・カイサリア地方と言うのは、そことは全然違う土地でありました。このフィリポ・カイサリア地方には異邦人は沢山住んではいましたが、一応フィリポと言うヘロデ家の王様に統治されていた、ユダヤ人の土地だったのです。この地方は、異邦人とユダヤ人の土地の境界線に位置し、信仰的にも様々な偶像崇拝におちいりやすい物事が沢山備わっていました。**

**皆さまフィリポ・カイサリア地方をネットで検索して頂ければ出て来ますが、この地方にはヘルモン山がそびえ、ヨルダン川の源流が泉となって湧き出でる洞窟があるような風光明媚な土地であります。そして、ローマ皇帝アウグストゥスを記念する像が安置された神殿が建てられていました。つまり、この時イエス様たちが足を運んだこのフィリポ・カイサリア地方と言うのは、偶像崇拝をすることのほうが普通であるような土地柄であったと考えられます。偶像崇拝と言うのは、溺（おぼ）れる者は藁にもすがる、というように、人がせっぱつまったときには、頼りにならないものでも頼りにするということです。つまり、この地方では、雄大で美しい大自然の造形物や、ローマ皇帝を記念する荘厳な神殿などが、住民にとって安易な、偶像崇拝の対象となっていたのでした。**

**こういった偶像崇拝は、今の時代に生きる私たちにとっても全く他人ごとではなく、私たちは、とにかくすごいものに目を奪われて、そのものこそが自分をとにかく救ってくれるのだと信じてそれを誤って拝んでしまうという罪な傾向を持っているのです。**

**その様な、風光明媚で、荘厳な神殿が建てられているフィリポ・カイサリア地方に入ったイエス様と弟子たち一行には、くつろげる宿もなかったのかも知れません。彼ら１３人は、「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」から始まる対話を、屋外で、静かな岩場に腰かけて行ったのかも知れません。そんな絵画が描かれています。彼らは持ち物もほとんどなくて、ただ、イエス様と共にいる、イエス様と共に歩んでいるということが、弟子たちにとっての拠り所であったことでしょう。この時の弟子たちの心境を黙想しますに、彼らはこんな風に思っていたのではないでしょうか。イエス様という御方は、嵐を鎮め、病気を癒す力を持っておられる全能の神様であり又、ここで私たちと一緒にいる人でもある。そして彼を信じてついていく私たちを決して裏切らないで、最後まで救って下さるお方だ、と。**

**でも、現実的には、未だ、その救いは、私たちの上に実現していないではないか、私たちはイエス様と共に、まさに命からがらあちこちを旅してまわっているだけではないかと言う思いも弟子たちにはあったことでしょう。**

**確かに、この時のイエス様を中心にして車座になって座っている弟子たちの様子は、はたから見ても、決して人目を引くような華々しさもなければ、美しさもなかったことでしょう。彼らは憐れな旅人の一団に見られたかもしれません。**

**しかし、そう言う場面において、弟子の一人であるシモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」とイエス様に答え、信仰告白をしたということは、印象的であります。弟子たちは、この時、の華々しさや美しさに誘惑されることなく、偶像崇拝におちいることなく、イエスさまの言葉一つ一つをよく聞いて、イエス様と対話することを選んだのでした。**

**さて、この時のペトロがした「あなたはメシア、生ける神の子です」という信仰告白は、教会の土台となることでとても大切なことです。教会は、ペトロから始まって、この様に信仰告白したクリスチャンたち一人ひとりの言葉によって形作られているのです。**

**ここら辺のことは、７月23日の特別伝道礼拝に来られた関川泰寛先生が研修会で語られたことですので、再度、お覚え頂ければと思います。**

**さて、「あなたはメシア、生ける神の子です」というイエス様一人を救い主として礼拝する信仰と言うのは、イエス様ご自身が「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ」と明言されていますように、人間的な学習の結果得られるのではなくて、天の父から与えられることです。先週、カナンの女は、ただ、イエス様に「主よどうか、わたしをお助け下さい」とすがりついて救いを求めたので、彼女には大きな信仰が与えられたのでした。又、ガリラヤ湖の上でイエス様に近づいていて沈みかけて「主よ、助けて下さい」と叫んだぺトロに対して、イエス様は「信仰の薄いものよ、何故疑ったのか」と言って、彼に手を差し伸べて救われました。それから船に乗り込んで、舟の中にいた人たちは、「ほんとうにあなたは神の子です」と言ってイエス様を拝んだのでした。**

**この様にガリラヤ湖の上でも弟子たちは「ほんとうにあなたは神の子です」と言ってイエス様に対する信仰を言い表していました。その言葉は今日の「あなたはメシア、生ける神の子です」と言うペトロの信仰告白と同じ意味内容であります。**

**しかし、イエス様が、このフィリポ・カイサリア地方に来て、再び、ペトロに「あなたはメシア、生ける神の子です」と、その信仰告白を語らせたのには、次の段階に歩みを進める深い意味がありました。イエス様はこの時、嵐の後のガリラヤ湖と言った場面ではなく、心を鎮めて皆が語り合える場面を設定して、ペトロにこの信仰告白を語らせたのでした。私たちは、この様に、の心の高ぶりなどによって、信仰告白するのではなく、そうではなくて、イエス様との静かな対話において、信仰告白へと導かれるのがよいのです。そしてそのようなイエス様と自分との対話が深まるにしたがって、私たちは益々、イエス様と親しくなり、イエス様によって新しい命へと招かれるようになるでしょう。**

**イエス様とペトロはこの時、心静かに対話をすることで、大切な約束をしたと言ってよいでしょう。それはどんな約束かと言いますと、18節以下「わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。**

**わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」という約束であります。**

**このイエス様との約束によって、信仰告白をしたクリスチャン一人ひとりには、天の国の鍵が授けられています。天の国の鍵を授けられた者には、「あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」という特権と責任が同時に与えられるのです。それはいわば、この地上で自分が行ったことが、天の国に入れられた時の行いのありようを決めていくという、まことに重い特権と責任であります。私たちは、主の祈りの中で「御心が天になるように地にもなされますように」と祈りますが、天の国の鍵が授けられた者は、反対にこの地上でイエス様に導かれて、御心を行って、天の国での行いを少しづつ先駆けることが出来るのです。**

**この様に語りますと、イエス様と約束をして共に語りながら歩んで行くとは、なんと重くて畏れ多いことかと思われるかも知れません。実に、ペトロ自身も、イエス様が十字架に掛けられることが現実的になった時には、イエス様のそばから逃げ去ったのでありました。**

**しかし、イエス様は、私たち人間の、約束を反故にするような弱さをも承知して、又イエス様のもとに立ち帰る者を、許してくださって、前にもまして豊かに祝福して下さるということを明らかにしています。**

**ペトロの信仰告白も、教会の不可欠な土台の一部であります。それと同じく、どんなクリスチャンの信仰告白も、何時まで経っても、教会の不可欠な土台の一部であり続けます。イエス様は、その御計画に従って、必要な時に、一人ひとりのクリスチャンを、教会の不可欠な土台として、豊かに用い祝福されようとしています。**

**教会と言うところは、私たち人間が、その組織や建物を守り存続させようとして、人間的な知恵を使って行うところではありません。そうではなくて、教会と言うところは私たち人間が口をそろえて「主よ、助けて下さい」「ほんとうにあなたは神の子です」と信仰告白して、イエス様によって守られるところであります。そのイエス様の御守りは永遠に続くのです。私たちは、その或る意味単純な全ての人の信仰告白を土台とする教会で、主の御栄をほめたたえ、主の平和を味わって参りたいと願います。**

**祈り**

**父なる神よ、あなたはこの世に御子イエスを遣わし、よるべない私たち一人ひとりに手を差し伸べ救い出してくだいます。私たち最後まで救いの御子に付き従って行くことが出来ますよう、私たちの信仰を大きくして下さい。**

**又、あなたはこの地に、教会を建て、天の国をあらわして下さいました。そこに呼び集められた私たちが、御子イエスの者とされ、この世には無い喜びと平和のうちに入れらますよう、私たちを聖霊で満たし、信仰をともに告白させて下さい。**

**あなたの御言葉は何年たっても何千年経っても変わることがありません。移ろいやすい喜びを追い求めて意気消沈する私たちを、どうか御言葉によって生きる者たちとし、常に御言葉によって救ってください。**

**み言葉によって、私たちを善き業へと導き、平和を作りだし、愛し合う者たちへと常に、新しくして下さい。**

**言葉の一つひとつを吟味し、神の言葉に応答する言葉をもって、隣り人を励まし、愛していく事が出来ますように**

**父と聖霊と共に一体であって**